日本史研究推進委員会夏季巡検報告―津久井方面

―津久井城から見える景色と歴史と宿場町としての小原宿本陣―

津久井高校　**日戸勇希**

はじめに

令和６年（2024）度夏季巡検では、７月 29 日（月）に下記コースにて、講師を迎え、実施をした。

◆コース…JR 橋本駅集合（8:30）→ 県立津久井城山公園 山頂登頂 → 昼食 → 県立津久井高等学校 → 小原宿本陣 → JR 相模湖駅（17:00 解散）

◆講　師…野口浩史氏（県立津久井湖城山公園長）、齊藤慎一氏（相模原市教育委員会）

１　津久井城から見える景色と歴史

津久井城は地理的には、北方に武蔵国、西方に甲斐国に接する相模国の西北部に位置している。そして、八王子から厚木・伊勢原・古代東海道を結ぶ八王子道と、江戸方面から多摩丘陵を通り津久井地域を東西に横断して甲州街道に達する津久井往還に近く、古来重要な水運ルートであった相模川が眼前を流れていることなどから、交通の要衝の地でもあった。戦国時代、当時の津久井地域は甲斐国境に近く、領国経営上重視されており、津久井城（城主内藤氏）は有力支城のひとつとして重要な役割を果たしていた。最終的に津久井城も徳川勢の本多忠勝、平岩親吉らに攻められ、落城したと伝えられている。落城後は徳川氏の直轄領になり麓に陣屋が置かれ、代官が政務を執った。陣屋は 1664 年に廃止された。そして、津久井城のある城山は地域統括拠点としての機能を終えることになる。

津久井城山頂まで登ると２方面の景色が見える。１つ目は八王子方面である。八王子方面には八王子城が見える。八王子城で戦が起きた際、打ち上げられた狼煙を確認して臨戦態勢に入ることができたとされている。２つ目は半原・愛川方面である。半原・愛川方面からは小田原城を本城とする北条氏が北上する際の様子を山頂から確認できていたとされている。また、津久井城山頂までは急な斜面になっている。本巡検では 45 分ほどかけて登った。山頂に城があったとするなら非常に攻めにくいということが分かった。津久井城が落城する際、大規模な戦闘もなかったとされている。

２　宿場町としての小原宿本陣

小原宿本陣は、神奈川県下 26 軒あった本陣で現存する唯一の建造物で、定紋のついた敷居の高い玄関がある建物である。本陣とは、江戸時代に参勤交代で大名行列をしながら江戸と領国を往復する際に大名が泊まる宿のことである。本陣建築を今に伝える貴重な建造物として、平成 8（1996）年に県指定重要文化財に指定された。小原宿本陣は、清水家の建物が利用され、信州の高島藩、高遠藩、飯田藩の大名と甲府勤番の役人であった。

小原宿本陣の１階には大名が泊まった上段の間がある。そこから眺められる庭園には徳川家より拝領したドウダンツツジや泰山木などが植えられていた。また、畳敷きの大名専

用トイレ（厠）も展示されていた。大名の健康状態を確認するため下は砂箱の引き出し式になっていることも分かった。さらに昔の教科書も展示されていた。師範学校時代の教科書等、戦争に近づくにつれ、どのように教科書の内容が変わっていったか確認することができた。

２階には「むかしの道具」が展示されていた。むかしの養蚕業の様子が分かる道具が主に展示されていた。例えば、機織が展示されており、蚕からとった糸を使い、絹の布を織ったことが分かる。むかしの道具は小学校で、大正時代または昭和時代のものを教わる。しかし、江戸時代に使われていたものを実物で見る機会は少ない。このような展示を拝見し、生徒の想像を膨らませることができるのではないかと考えた。

おわりに

「城」「宿場」をテーマに授業で扱える資料が多くあった。津久井城では、巡検後「津久井城を落城させるためにはどこから攻めるか」という探究を行った。歴史だけでなく、地理的な思考も働かせることができた。小原宿では、「小原宿が宿場として優れていたのはどのようなところか」という探究を行った。他にも様々な観点で授業づくりに活かせることができる。今回の巡検を通して、生徒に探究の視点の視野を広げていきたい。

津久井城から見た半原・愛川方面

津久井城から見た八王子方面

夏季巡検の様子

小原宿本陣　上段の間